

健康への道

名古屋大学総合保健体育科学センター

最早期の記憶と人生のテーマ

(保健科学部主任、保健管理室長) 小川 豊 昭

最早期の記憶とは、最も古い記憶、思い出せる限りで最も幼い時の記憶である。最早期の記憶を話してくださいと言われても、たいていの人は戸惑うであろう。一体どの思い出が一番古いのか判然としないし、そもそもその記憶されているものが本当に記憶なのか、母親が言ったことなのか、幼いころの写真を見て、記憶と思い込んでいるだけなのかははっきりとはわからないからである。ところが、この本物の記憶かどうかとも判然としない曖昧な幼い時の断片的な記憶は、人生全体に影響を及ぼす大きな意味を持つのである。(その理論的背景は、非常に複雑であるが、夢と同じ様に構成されているとだけ、述べておこう。すなわち精神分析的に解明する必要があるのである。)

コスタリカから来たある女医は、最早期の記憶として「生まれて間もない弟が死に母親が泣き叫んでいる光景」を語った。彼女は、本国では厚生省の役人として乳幼児の保健指導の仕事をしている。強い使命感を持って日本にまで勉強に来ているのである。彼女に最早期の記憶と今の彼女の仕事が直接関係していることを指摘すると、確かにそのとおりだと驚いていた。この例では、分析の必要もないがこの弟の死に対して泣き叫ぶ母親というのは、2歳の彼女にはトラウマであったろうし、母親の悲しみを自分がなんとかしてあげたいと考えたのであろう。彼女はその時のことは忘れていたし思い出すことも殆どなかったのに、その後の人生はあたかも弟の死を防いで、母親の悲し

みを防ぐために捧げられているかのようである。この記憶の裏には、更に彼女と母親の葛藤に満ちた関係が含まれている。弟が生まれたことで、母親の注意がすっかり彼女から離れてしまって寂しく感じたことや、その後弟が死んだ後は母親が彼女に対して理不尽な怒りを向けるようになったことなどが、この記憶には、含意されているのである。

次に紹介するのは、イギリス人の若い女性患者である。眠ると恐ろしい夢を見るので、明かりをここのと点けテレビもつけっぱなしで寝ると言った。彼女は、真っ黒な服を着て診察室にやってきて、最初は私が黙っているのに当惑していたが、間もなく堂々とした態度で病状の説明を始めた。彼女が十分に話終わったところで、私は「あなたの着ているのは、南フランスなどで、老婦人が巡礼に着る服のように見える」というと、彼女は、少し驚いたようであったが、更に「あなたは、早く大人になり過ぎて、ずいぶんと年よりのような気がしているのではないか、ただ死を待っているだけのような気がしているのではないか」と解釈した。さらに私は、「今あなたは、まるで大人が子どもを扱うような態度で接している」と指摘し、彼女が幼児期から不安に対して早く大人になることで、克服しようとしてきたことを指摘した。そうすると彼女は、幼児期の不安な環境のなかで背伸びしてがんばってきたことを思い出して語り出した。話が一段落したところで、私が「もっとも

早期の記憶は何ですか」とたずねると、「幼いとき、棒によじ登っていて、あと少しでてっぺんに手が届くと言うときに落ちて、歯を折った」と言う話をした。そこで私は、彼女が診察申し込みのメールですでに語っていた最近のエピソードで、職場で非常に有能だと言われて、昇進の約束を貰っていたのに、左遷されたと言う出来事と同じ構造になっていることを指摘した。しかもこれは、早く大人になり過ぎて今は死におびえると言う今の症状とも同じ構造であることを指摘した。このような解釈に対して、彼女は深く理解されたと感じたようであった。彼女の最早期の記憶「がんばってよじ登るが、てっぺんに届くときに落ちて傷つく」ということが彼女の人生で様々な形で反復されていて、彼女の人生のテーマとなっていることがわかる。(保健科学部)

トピックス 1

胸部レントゲンの Risk & Benefits

小池晃彦

春の学生健康診断の時期には、保健管理スタッフは業務に忙殺される。医師は、昼は学生と面接をし、夜中まで胸部レントゲンの読影をする。心電図には、かなり正確な自動診断機能がついていて助かるが、レントゲンは1枚ずつ見ていくしかない。衛生状態の悪かった時代には、結核をはじめ重要な疾患が多くみつかったのだろうが、現代の無症状の学生に、病院受診を要する疾患が見つかる頻度は極めて低いはずである。胸部レントゲン1枚だけであっても被爆するわけであるし、レントゲン撮影の必要はないのではという意見にも個人的には異論はない。法律上は、学部学生の1年生では胸部レントゲン撮影が必須であり、医学生などは毎年受ける必要がある。実際には就職活動、奨学金申請で必要になる場合もあり、大部分

の学生がレントゲン撮影を受けている。(なお、胸部レントゲンの被曝は0.01~0.04mSV程度で、日本人一人あたりの自然放射線被曝が年間平均1.5mSVであることからすると被曝量は少ない。また、7.8mSV程度とされる胸部CTでの被曝と比較すると胸部レントゲンでの被曝はその100分の1以下である。)

さて、無症状の10-20代の若者の胸部レントゲンを毎年とる意義があるかは見方により異なり、単純には結論できない。しかし、結核など重要な疾患が実際に発見されることはある。最近では留学生が増加し、特に結核については注意が必要なケースも増えている。感染症以外でも、病院受診や治療が必要な場合もある。学生にとって不安とストレスがいかばかりかと心配するが、がんばっていただきたいと願いつつ説明する。一方、職員健康診断については、全般的には若い年代とはいえ、学生と比べ病気の頻度は当然高まる。従って、私たちもひとりのレントゲンを2名の医師が別々に読影するようにしている。職員でレントゲンをとる理由はと問われれば、肺がんを頭に思い浮かべる方も多いと思う。

胸部レントゲンで、肺がんがあったとしてひっかかる確率はどれぐらいであろうか。報告により異なるが60%程度とするものもある。つまり、肺がんがあっても胸部レントゲン検査では40%は正常として見逃されることになる。胸部レントゲンは、肺、血管、心臓、骨など3次元の空間を平面にするわけであり、重なりあった部位にある肺がんは見つけることに限界がある。なお、異常の疑いとして精密検査を指示されても、多くの場合は肺がんではないので、心配しすぎることをないようにしていただきたい。健診でのレントゲン検査は、スクリーニングが主な目的である。私たちは見逃しがないように、しかし余分な精密検査を指示し心配をかけないように、と頭を悩ましながら読影をしている。